

# 序

みなさんは救急で勤務をしている際に、精神科にかかわる患者対応で苦労したことはないでしょうか。家族との口論のあとに昏迷を起こして救急搬送されてきた患者，統合失調症で精神科病院入院中に腸閉塞を起こして転院搬送されてきた患者，緊急入院後にせん妄を起こした患者…など，救急医療の現場では精神科にかかわるさまざまな病態と遭遇することがあります。

本来であれば，身体疾患を身体科医がみるように，精神科にかかわる病態は精神科医がみるのが理想的です。しかしわが国には精神科を主とする病院（いわゆる単科の精神科病院）が数多く存在し，そこで勤務する精神科医が多いため，総合病院で勤務する精神科医が少ないといった背景があります。またたとえ総合病院のなかに精神科医がいたとしても，外来や病棟業務が忙しく救急対応まで人手が回らないといった問題や，精神科と救急（身体科）の連携がうまくいかないといったことがあります。その結果，救急搬送されてきた精神科にかかわる患者は，なかなか精神科診察を受けることができず，退院が長引いてしまったり，やむなく身体科の先生が精神科対応を強いられることがあります。

この本は救急に携わるなかで精神科対応が必要な先生がたに向け，2017年秋に日本救急医学会総会でお話しさせていただいたことを軸にして，執筆いたしました。なかには十分に書ききれなかったテーマもありますので，読み進めていくなかで疑問を抱かれたことはぜひ文献検索で掘り下げてもらえればと思います。そしてこの本が少しでもみなさんの臨床の手助けになれば，筆者としてこれ以上の喜びはありません。

私は精神科でしばらく働いた後，関西・関東の救急医療機関に身を置きながら，精神科にかかわる患者を診てきました。この本を刊行するにあたり，いままでお世話になった救急の先生がた，そして精神科の先生がたに

感謝を申し上げたいと思います。そしてそのなかでもお世話になった関西医科大学総合医療センターの中森靖先生，執筆にあたり一部の原稿を見ていただいた関西医科大学の嶽北佳輝先生，熊本医療センターの橋本聡先生，延び延びになった締め切りを辛抱強く待ってくださった羊土社の保坂早苗さま，溝井レナさまに，厚くお礼を申し上げたいと思います。

2019年9月

北元 健